

グラナダ王国の征服

—降伏文書の検討を中心として—

林 邦 夫

(1983年10月12日 受理)

The Conquest of the Kingdom of Granada: An Inquiry into the Capitulations

Kunio HAYASHI

スペイン中世が、イスラム教徒によって征服された領土を再征服するという運動（レコンキスタ Reconquista）によって貫かれていたことは周知の所であろう¹⁾。レコンキスタは、13世紀半ば頃までにはグラナダ王国のみを残すところまで進展し、グラナダ王国はカスティーリャに貢納を送ることによって、緊張を孕みつつも、その独立を保っていた²⁾。

カトリック両王時代には、カスティーリャ女王イサベル1世とアラゴン王フェルナンド5世が婚姻していたという事情により、たとえそれが王冠の合体にすぎなかったとはいえ、イベリア半島に、ひとつの巨大な政治的統合体が現出した。かかる政治的統合体が半島内での覇権確立を目指して他の政治勢力との確執に入っていくのは当然の成行であった、といえよう。かかる一般的傾向がレコンキスタの伝統と結びつくとき、グラナダ王国の征服が日程に上ってくることになる。

本稿は、カトリック両王の対外政策分析の一環としてグラナダ王国の征服を取上げ³⁾、その具体的経過を明らかにするとともに、降伏文書（capitulaciones）の検討を通してカトリック両王による征服後の統治の基本的性格を指摘することを目的としている。

さて、カスティーリャ王位継承をめぐる内紛のため、イサベルとフェルナンドは差当りはグラナダと事を構える余裕はなく、1475年6月に1年間の休戦協定を結び、それが切れる1476年6月20日に、5年間の休戦協定が結ばれたが、双方の側からの越境侵入があり、結局1478年1月17日に3年間の休戦協定が締結された⁴⁾。しかし、これはグラナダ側からの攻撃によって破られ、ここにグラナダ征服戦争の火蓋が切られたのである。そこで次にグラナダ征服戦争の経過を概観していこう。

〔略語表〕

- Pulgar Hernando del Pulgar, *Crónica de los señores Reyes Católicos*, en BAE, t. LXX, Madrid, 1953.
 Palencia Alonso de Palencia, *Guerra de Granada*, en BAE, t. CCLXVII, Madrid, 1976.
 Bernáldez Andrés Bernáldez, *Memorias del reinado de los Reyes Católicos*. Ed. y estudio por M. Gómez-Moreno y J. de M. Carriazo, Madrid, 1962.
 Historia *Historia de los hechos de Don Rodrigo Ponce de León,} marqués de Cadiz*, en CODICIN, CVI.

- Zurita Jerónimo Zurita, *Anales de la Corona de Aragón*, t. 8, Zaragoza, 1977.
 BAE Biblioteca de Autores Españoles
 CODOIN *Colección de documentos inéditos para la historia de España*, 112 tomos, Madrid, 1842-1896 rep. Nendeln, 1964-1966.

- 1) レコンキスタについての最近の標準的な研究として, D.W. Lomax, *The Reconquest of Spain*, London & New York, 1978 がある。
- 2) グラナーダ王国についての最近の総合的研究として, R. Arié, *L'Espagne musulmane au temps des Nasrides (1232—1492)*, Paris, 1973; M.A. Ladero Quesada, *Granada. Historia de un País islámico (1232—1571)*, Madrid, 1978² が, また近年の研究動向の紹介として, Id., “La investigación histórica sobre la Andalucía medieval en los últimos veinticinco años (1951—1976)”, en *Actas I Congreso Historia de Andalucía. Andalucía Medieval*, tomo I, Córdoba, 1978, pp.243-249 がある。
- 3) 筆者は, カトリック両王の対外政策研究の一環として, 既に対ナバラ政策を扱った。拙稿, 「カトリック両王の対ナバラ政策」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文社会科学編』第33巻, 1981年。
- 4) J. Torres Fontes, “Las relaciones castellano-granadinas desde 1475 a 1478”, *Hispania*, 22, 1962; J. de M. Carriazo, “Historia de la Guerra de Granada”, en *Historia de España*, t. XVII (1), 1969, pp. 409-418.

I

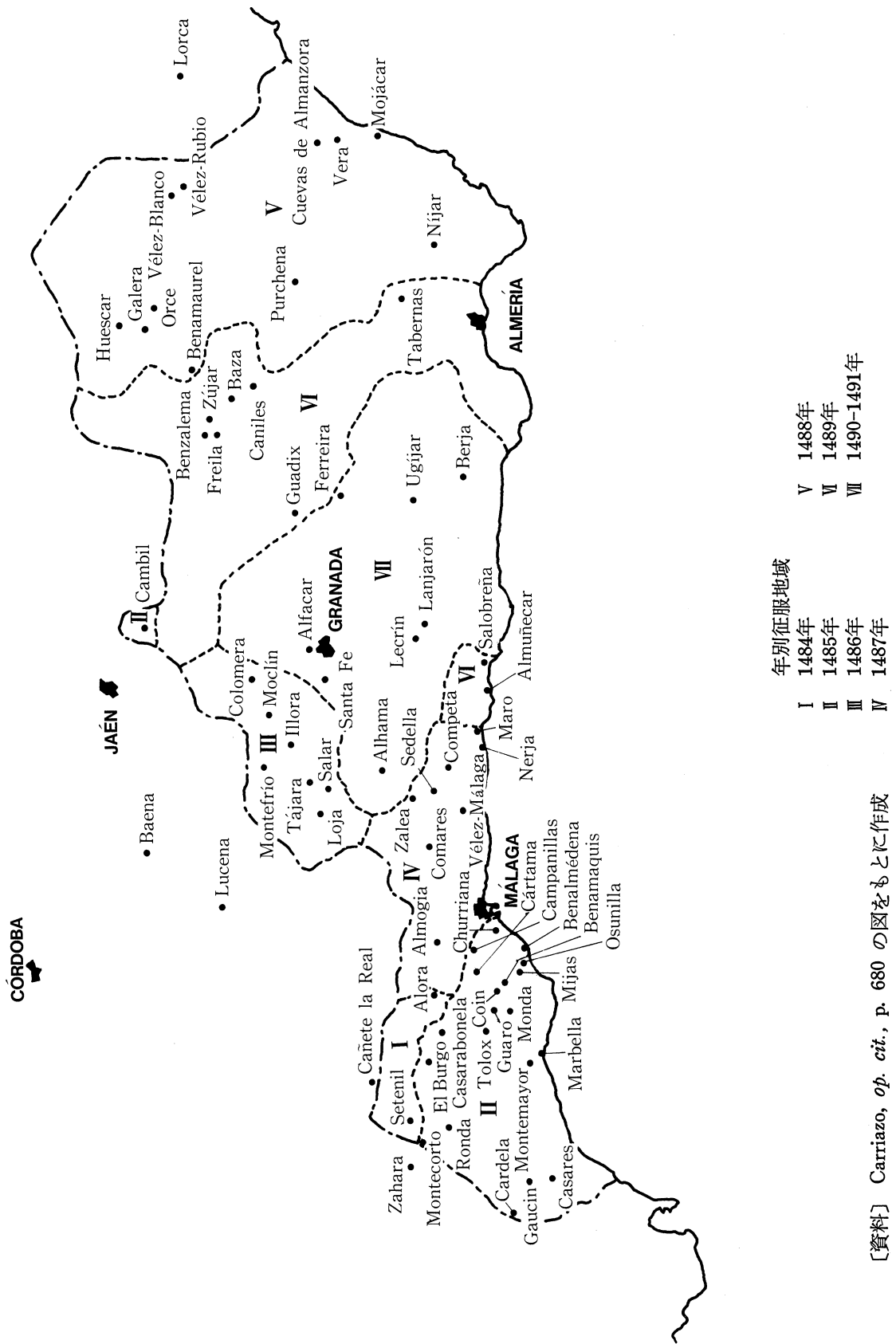
叙述の便宜のために, 4期に分けて戦争の経過を辿っていくことにする¹⁾。

[1] 1482—1484年

グラナーダ戦争は, 1481年12月27日, グラナーダ側がサアラ (Zahara) を攻撃・占領し, 城代を殺害, 住民を捕虜とした事件によって開始された²⁾。1482年1月12日付のカトリック両王のセビーリャ市参事会宛書簡は, サアラ陥落が, 今まで実行すべきだと考えていたことを直ちに実行に移す機会を与えた, すべての地方でモーロ人に対する戦いの準備が整えられ, 唯サアラが奪回されるのみでなく, 他の町々も獲得されるよう望む, と述べて, 予てから考えていたグラナーダ王国の征服にとりかかる決意を伝えている³⁾。サアラ占領に対する報復として, 1482年2月28日, カディス侯を中心とするアンダルシア貴族とセビーリャ市の軍隊がアルアマ (Alhama) の攻撃を開始, これを占領し, モーロ人の男800人を殺害し, 少数の逃亡者を除く残り3,000人を捕虜とした。イスラム側はアルアマの奪還を図るべく, 3月・4月・7月と攻撃を繰返すが失敗し, かくしてキリスト教徒側はグラナーダ王国内部に橋頭堡を築くことに成功した⁴⁾。このアルアマへの補給を確保すべく, 国境とアルアマとの中間地点ローハ (Loja) の奪取を狙い, 6月末に攻撃が開始され, 7月1日にはフェルナンドがコルドバを進発してローハ近傍に陣を布くが, モーロ人の救援があり失敗に帰する⁵⁾。10月にはイスラム側が, 防備の手薄となった隙についてカニェーテ=ラ=リアル (Cañete la Real) を襲撃し, 婦女子・老人を捕虜として町を災上させ⁶⁾, 一方, キリスト教徒側も12月末にカディス侯がセテニール (Setenil) を攻撃する⁷⁾ など, 双方の側から互いに攻撃が加えられた。

ところで当時のグラナーダ王国 (ナスル朝) の支配者はムレイ・アセン (Muley Hacén, イスラ

〈図〉 グラナダー王国の征服過程



[資料] Carriazo, *op. cit.*, p. 680 の図をもとに作成

ム名 Abū-l-Hasan ‘Ali) であったが、彼は掠奪されてきたキリスト教徒の女ソラーヤ (Zoraya, Isabel de Sólis) に寵愛を移していたため、妻ファーティマ (Fátima) とその息子ボアブディル (Boabdil, イスラム名 Abū ‘Abd Allah) との間が険悪化していた。ボアブディルは幽閉されていたグラナダを、1482年7月14日に脱出し、グワディシュ (Guadix) へと逃亡するが、間もなくグラナダで反乱が勃発し、ムレイ・アセンが追放され、ボアブディルがムハンマド11世⁸⁾として国王に推戴された。ムレイ・アセンは弟のサガル (El Zagal, イスラム名 Abū ‘Abd Allah Muhammad) と共にマラガへ退き、復位の機会を窺うことになる。

グラナダ王となったボアブディルは、1483年4月、カスティーリャ王国内に侵入、ルーケ (Luque), バエナ (Baena) を略奪し、ルセーナ (Lucena) へ向かったが、ここでの戦闘でカブラ (Cabra) 伯などの軍隊に敗れ、捕虜となってしまふ⁹⁾。フェルナンドは6月にタハラ (Tájara) を陥落させ、すべてのモーロ人を捕虜とし、財産・糧食・武器・馬を奪い、町に火に放ち、城壁を破摧した後¹⁰⁾、同月30日にコルドバに帰還、ボアブディル側と折衝を行ない、ボアブディルによる①カトリック両王への臣従、②毎年12,600ドブラ (doblas) の貢納の献上、③400人のキリスト教徒捕虜の解放など、を内容とする協定を結び、これによってボアブディルは9月末か10月初めに釈放され、グラナダ王国内へ戻った¹¹⁾。こうしてカトリック両王はグラナダ王国内に有力な同盟者を獲得したのである。

1483年10月28日、カディス侯はサアラを奪還し、国王からカディス公・サアラ侯の称号を下賜されたが¹²⁾、1484年6月にはフェルナンドが自ら大軍を率いてコルドバから遠征の途に上り、8日間の攻囲の末に同月18日に、アローラ (Alora) を降伏させ¹³⁾、9月6日にセテニールの攻撃を開始、20日にこれを降伏させるという戦果を収めた¹⁴⁾。

グラナダではボアブディルが捕虜となったため、ムレイ・アセンが復位していたが、これによってイスラム側の結束が強まることを恐れたフェルナンドは、既述の如くボアブディルを釈放して、イスラム側の分裂を図る。しかし1483年10月17日付のグラナダのファキーフ (法学者) のファトワー (法的意見) が、ボアブディルは「内乱の火を放ち、ムスリムの心の裡に敵意と憎悪の種を播き、協和を破壊した」と糾弾している¹⁵⁾ことが端的に示すように、ボアブディルのグラナダ王国内での地歩は必ずしも強固だった訳ではなく、1485年2月にはサガルがボアブディル陣営側の都市アルメリーアを占領し、これによってボアブディルは3月初め、カスティーリャ王国への逃亡を余儀なくされる。

[2] 1485—1487年

1485年3月末、フェルナンドはコルドバから遠征に出発し、4月ベナマキス (Benamaquis) を武力征服した。ここは以前に臣従を申出て受入れられたが、フェルナンドが去った後に叛旗を翻したために再び攻撃が加えられ、攻囲中にキリスト教徒捕虜を殺害したこともあって、モーロ人108人が斬殺・絞首され、残りすべてが捕虜となり、町は焼払われ、城壁は破壊されたのである¹⁶⁾。次いでコイン (Coin) にベナマキスの奪取を伝えて降伏を勧告するが、肯じず防戦したため攻囲して降

伏に迫込み、町を破壊した¹⁷⁾。間もなくカルタマ (Cártama) も降伏を受入れるが¹⁸⁾、コイン、カルタマの攻囲中に、チュリアーナ (Churriana), カンパニーリャス (Campanillas), グワロ (Guaro), など七つの町のモーロ人が攻撃を恐れて逃亡したため、キリスト教徒側はこれらの町の塔・城壁・農地を破壊した¹⁹⁾。5月8日には、ロンダ (Ronda) の攻囲が始まり、22日に降伏²⁰⁾、引続きモンテコルト (Montecorto), カルデーラ (Cardela), ガウシン (Gaucín), カサーレス (Casares), トロクス (Tolox), エル=ブルゴ (El Burgo), モンダ (Monda) なども降伏した²¹⁾。カサラボネーラ (Casarabonela) の場合は降伏の事情がやや詳しく判明する。すなわち、フェルナンドはカサラボネーラに使者を派遣して降伏を勧告したが、これに対してモーロ人側は「陛下が、カサラボネーラのモーロ人が降伏した場合は、彼らの望むことを許そう、と語られたことを我々は承りました。……陛下に敬事することが我々にとって妥当であります」といった旨の降伏受諾の書簡をフェルナンドに送り、6月2日に引渡しが行なわれたのである²²⁾。マルベリャ (Marbella) の場合は、リバデオ (Ribadeo) 伯が降伏の交渉にあたり、これを受諾させたが²³⁾、それを知ってモンテマヨル (Montemayor) など近傍の13の町々も降伏するに至る²⁴⁾。その後軍勢はミーハス (Mijas) とオスニーリャ (Osunilla) に向かいこれを降伏させ、ベナルメデナ (Benalmédena) を破壊し、マラガに近づくが、兵力の疲弊や糧食不足のために攻囲は断念し、帰還の途についた²⁵⁾。

コルドバで兵を養った後、9月にはハエン攻撃の拠点となっていた河を挟む二つの城砦カンビル (Cambil) とアルアベル (Alhaber) を攻撃して、23日に降伏させたが²⁶⁾、1485年には、こうした国王の主力軍の動きとは別に、アルアマが単独で兵を繰出してサレア (Zalea) を実力で奪取し、モーロ人全員を捕虜にしている²⁷⁾。

一方、イスラム側の情勢を見ると、ポアブディルからのアルメリーアの奪取、アルアマ補給部隊の壊滅などの戦功で声望を高めていたサガルが兄のムレイ・アセンに代わって、ムハンマド12世として即位、ムレイ・アセンは間もなく没した。これによってイスラム側の結束強化を危惧したフェルナンドは、恐らく1483年のコルドバ協定と同じ条件で再びポアブディルのグラナーダ王国への帰還を許した。ポアブディルは王国の東部を手中に収め、この勢いに乗じて1486年3月9日、ポアブディルの党派がグラナーダで蜂起して市街戦となったが、5月19日すぎには内紛によってキリスト教徒との戦いが不利なることを恐れたファキーフ達の仲介によって妥協が成り、サガルはアミールの称号を保持してマラガ、グラナーダ、アルメリーアを含む王国の西部を、ポアブディルは王国の東部を夫々実質的に支配することになった。

1486年4月末からの遠征では、5月28日にグラナーダ平野 (Vega de Granada) へ進出するための要衝の地であるローハを降伏させ、キリスト教徒捕虜140人を解放したが、ここを守備していたのがポアブディルであり、彼は再び捕虜となった²⁸⁾。キリスト教徒側は、5月30日にローハ、アルアマ間のサラル (Salar)²⁹⁾、6月8日にイリョーラ (Illora) を降伏させ、後者では11人のキリスト教徒捕虜が解放され³⁰⁾、6月17日にはカディス公の仲介でモクリン (Moclín)³¹⁾ が、また同日中にモンテフリーオ (Montefrío), コロメーラ (Colomera) が次々に降伏していき、前者では26人の捕

虜が自由の身となった³²⁾。

ところで、捕虜となったボアブディルとは、①ボアブディルはカトリック両王に臣従する、②ボアブディルが5月29日より8ヶ月以内に、バーサ (Baza)、ベーラ (Vera)、ベレス＝ブランコ (Vélez-Blanco)、ベレス＝ルビア (Vélez-Rubia)、モハカル (Mojácar) を含む地方を服属させるなら、両王はそれらの地方を、伯或いは公の称号とともにボアブディルに恵与する、という内容の協定が結ばれた³³⁾。ボアブディルは7月半ばにはベレス＝ブランコに入ったが、バーサ、グワディシュ、アルメリーアはサガル側につき、情勢はボアブディルにとって不利であった。しかしボアブディルは9月半ばには、グラナダの郊外区アルバイシン (Albaicín) に入ることに成功し、以後そこを拠点としてサガル側と対峙していくことになる。

1487年4月上旬にコルドバを進発した遠征軍は、16日にベレス＝マラガ (Velez-Málaga) に到着・攻囲し、5月3日にはシフエンテス (Cifuentes) 伯の交渉によって降伏させ、100人の捕虜を解放した³⁴⁾。ベレス＝マラガの降伏によって、アルモヒア (Almogia)、コマレス (Comares)、セデーリャ (Cedella)、コンペータ (Competa)、マーロ (Maro)、ネルハ (Nerja) など多くの町々が降伏を受入れた³⁵⁾。遠征軍は、5月7日にはマラガに到着し、攻囲戦に入り、海上からの船隊による攻撃も加えられ、攻囲は長期に及び、モロー人側もヒブラルファロ (Gibralfaro) 城代のセグリ (Hamet el Zegrí) を中心とする抗戦派と、富裕商人のドルドゥクス (Alí Dordux) を中心とする和平派とに分裂したが、結局後者が優位を占め、3ヶ月の攻囲の後に、8月3日降伏するに至ったのである³⁶⁾。これによってミーハス、オスニーリャといったマラガに軍勢を送っていた町も砲撃され、降伏した³⁷⁾。

時期は遡るが、サガルはベレス＝マラガ攻囲を知り、4月19日にグラナダを出発して援助に赴くが、結局ベレス＝マラガが陥落したためアルメリーアへと撤退した。ボアブディルはサガルの不在の隙をついて4月29日にグラナダ全市を掌握、これを同日付の書簡³⁸⁾でカトリック両王に知らせるとともに、使者を派遣して、全11箇条から成る新たな協定を結んだ³⁹⁾。それは、①ボアブディルは可能となったときはいつでもグラナダとその城砦を引渡す(第1条)、②ボアブディルはグラナダ引渡し後に、彼に帰服しているすべての市町村・城砦を引渡す(第2条)、③カトリック両王はグワディシュ、バーサ、ベーラ、ベレス＝ブランコ、ベレス＝ルビオ、モハカル、プルチエーナ (Purchena) 谷などをボアブディルに恵与する(第3条)、④両王はアルバイシンの住民がムデハル (mudéjares, キリスト教徒支配下のイスラム教徒) として居住し続けることを許し、10年間の免租を保証し、メスキータを存続させる(第8条)、を主な内容としている。ボアブディルのグラナダ征圧により、グラナダ王国は、ボアブディルがベレス＝ブランコ、ベレス＝ルビオ、ベーラ、グラナダなどを、サガルがバーサ、グワディシュ、アルメリーアなどを領する形勢となり、1488年を迎えることになる。

[3] 1488—1489年

1488年6月7日、フェルナンドのロルカ (Lorca) 到着をまって当地に集結していた軍勢が進発し、

10日にベーラ、クエバス (Cuevas de Almanzora), 13日にモハカル, 20日までにベレス=ブランコ, ベレス=ルビオ, ニハル (Níjar), ウエスカル (Huescar), ガレーラ (Galera), オルセ (Orce), ベナマウレル (Benamaurel) など45に上る町々が次々に降伏していった⁴⁰⁾。これらの地域はボアブディルに帰服していたが, 敢えてそれをフェルナンドが征服した所以は, 1487年協定の大前提であるグラナーダの引渡しがまだ実現されておらず, ボアブディルの動向に不安があったためであろう。

1489年になると, 今度はサガルに帰服していた地域に攻撃の鋒先が向けられた。同年5月ハエンに集結した軍勢を率いてフェルナンドは遠征に向かい, まずスハル (Zújar) を降伏させ⁴¹⁾, 次いでフレイラ (Freila), ベンサレマ (Benzalema) が降伏し, カニーレス (Caniles) では住民が逃亡した⁴²⁾。6月中旬にはバーサ攻囲が始まり, サガルは従兄弟の Yahya Alnayar を増援に差向けて抗戦させるが, 5ヶ月の長期に亘る攻防戦の末, 11月28日にバーサは降伏し, 12月4日に引渡しが行なわれ, 510人のキリスト教徒捕虜が自由を得た⁴³⁾。バーサに続いて, プルチェーナ, タベルナス (Tabernas) などが降伏を受入れた⁴⁴⁾。バーサ降伏後, サガルはカトリック両王側の説得に応じ, アルメリーアとグワディシュの引渡しを決断し, 22日にアルメリーアで両王を出迎え⁴⁵⁾, 30日には両王に随伴してグワディシュに行き⁴⁶⁾, 両市の引渡しを行なった。グワディシュ引渡し後に, アルムニェカル, サロブレニャ (Salobreña) も, グワディシュと同じ条件で降伏を申出た⁴⁷⁾。

こうしてサガルは完全にカトリック両王の軍門に下るのだが, 両者の間には既に12月10日付で全12箇条から成る協定⁴⁸⁾が結ばれていた。主な内容は, ①サガルは, 12月3日から20日以内に臣従し, それから70日以内に彼に従っているすべての市町村・城砦を引渡すこと(第1条), ②アルメリーアを引渡すこと。これに対し両王はサガルにアンダラクス (Andarax, アルメリーア近辺の地方), レクリン (Lecrín), ランハロン (Lanjarón) の諸地方と, そこからの収入, 及びラ=マアラ (La Mahara) の塩税の半分を恵与する(第2条), ③アルメリーア引渡し後, 2万カステリャーノをサガルに恵与する(第3条), ④サガルに対して王国内の如何なる土地での居住も許し, そのために安全保証状を与える(第4条), ⑤サガルの所領へのキリスト教徒の立入りを禁ずる(第5条), ⑥サガルはいつでも全財産をもってアフリカへ移住してよい。その場合には無償で船を提供する(第6条), ⑦キリスト教徒捕虜の身代金をサガルに支払う(第7条), ⑧サガルとその親族がグラナーダ市内にもつ財産は免租される(第8条), ⑨サガルやその親族の馬と武器(火器は除く)の所有を保全する(第9条), ⑩アフリカ移住の場合は, 残していく土地や塩税収入の代償として3万ドブラを与える(第10条), である。また Yahya Alnayar とフェルナンド との間にも, 12月25日付で全7箇条から成る協定⁴⁹⁾が結ばれたが, その主な内容は, ①フェルナンドは Yahya Alnayar を保護下に受入れ, 王国の大諸侯と同様に遇する(第1条), ②彼の改宗の希望を密かに叶える(第2条), ③彼の所有するブドウ畑・城砦などを保全する(第3条), ④彼とその子孫に対してアルカバーラなどの租税を免除する(第5条), ⑤20人の武装兵の維持を許す(第6条), である。

こうしてサガルと Yahya Alnayar が帰服した今, ボアブディルの去就が問題となってくる。

[4] 1490—1492年

